

め うし  
**雌牛のブーコラ** 愛蔵版  
おはなしの  
ろうそく 12

東京子ども図書館一編



もくじ

はじめに——おねがいふたつ 3

\*

マツチ売りの少女（ハンス・クリスチャン・アンデルセン作） 13

鳥になりたかったこぐまの話（アデルとカトー・ド・レーエエフ作） 29

絵姿女房（日本の昔話） 41

コヨーテとセミ（北米先住民の昔話） 53

海の水はなぜからい（ノルウェーの昔話） 69

\*

雌牛のブーコラ（アイスランドの昔話） 91

わらべうた ふたつ 103

腹のなかの小鳥の話（アイヌの昔話） III

おやふこうなあおがえる（朝鮮の昔話） 131

九人の兄さんをさがしにいった女の子（フィンランドの昔話） 137

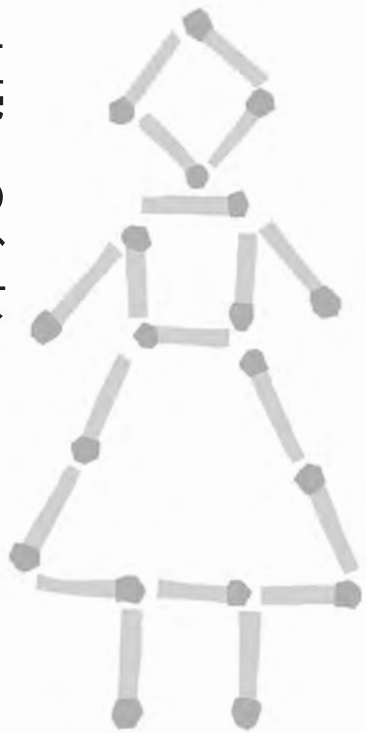
\*

あとがき 169

●表紙・さし絵  
——  
大社玲子

雌牛のブーコーラ——愛蔵版おはなしのろうそく  
12

マッチ売りの少女



たいそう寒い日のことでした。雪がふっていました。あたりは、もう暗くなりはじめていました。

それは、一年の一番おしまいの日、大みそかの晩でした。

この寒い、そして暗い中を、ひとりのみすぼらしい身なりの少女が、ぼうしをかぶらず、おまけにはだしで、通りを歩いていました。それでも、うちを出たときには、布ぐつをはいていたのです。けれども、そんなものがなんの役に立つでしょう。それは、とても大きなくつでした。ついこのあいだまではおかあさんがいっていたのですから、大きすぎたのです。しかも、そのくつも、さつき往來をいそいで横切ろうとしたとき、二台の馬車がおそろしいいきおいで走ってきたものですから、よけたひょうしにぬけてしまったのです。かたほうはどうしても見つかりま

せんでした。もうかたほうは、よその男の子が、今に自分の赤ん坊が生まれたら、ゆりかごに使える、といいながら、もっていつてしまいました。



こうして、今この少女は、小さいはだしの足を寒さのためにむらさき色にして、歩いていました。古ぼけたエプロンの中には、マッチがたくさんはいっています。そして、手にも、ひと束もっていました。けれども、きょうは一日じゅうだれも買ってくれません。だれひとり、わずか一スギリンのお金もめぐんでくれる人はありませんでした。少女は、おなかをへらし、寒さにふるえながら歩いていました。そのようすは、ほんとうにあわれでした。

えり首のところでも美しくカールしている長い金色の髪の上に雪がふりかかっています。でも、少女は、今はそんな身なりのことなんか考えていませんでした。

どの家のまどからも、明かりが外にもれていました。そして、ガチョ

ウの焼き肉のおいしそうなにおいが、往來までただよっています。それもそのはずです。大みそかの晩ですもの。そのことを少女は考えていたのです。

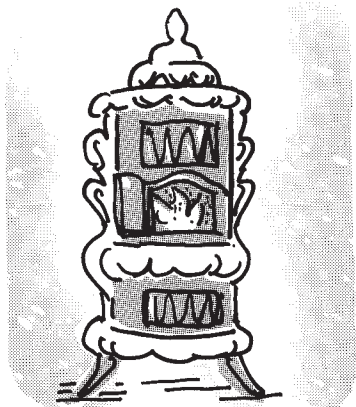
さて、家が二けんならんできて、一けんがもう一けんより通りへ少しつき出ているところがありました。その二けんのあいだのすみっこに少女はからだをちぢめて、うずくまりました。そして、小さい足をからだの下にひきよせました。けれども寒さはつのるばかりです。



でも、少女は家へ帰ろうとはしませんでした。マッチはまだひとつも売れていませんし、お金だつて一銭も手に入れていません。家に帰れば、お父さんにぶたれるにきまつています。それに、家に帰ったところで寒いのは同じです。屋根とは名ばかりで、大きなすきまはワラやぼろ切れでふさいでありますでしたが、それでも風はピューピューと吹きこんできました。

少女の小さな手は、寒さのためにかじかんでいました。ああ！　こんなとき、一本のマッチがあれば、指先をあたためられます。もっているマッチの束から一本ぬいて、かべにこすりさえすればいいのです。

少女は、マッチを一本、ひきぬきました。シュツ！

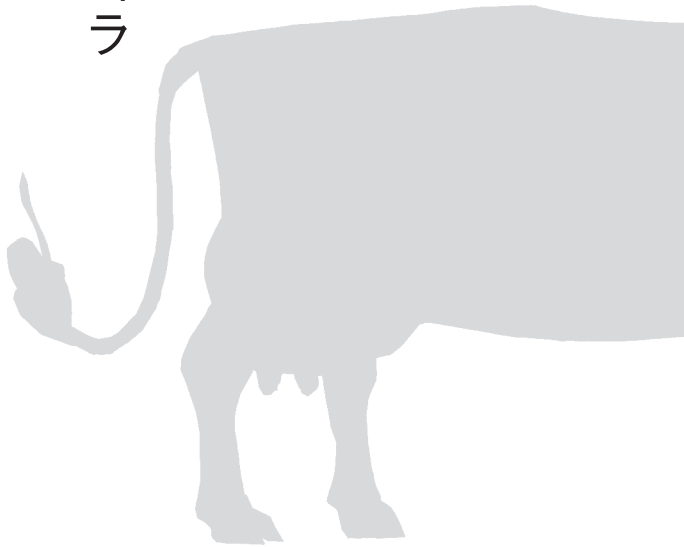


火花が出て、マッチはもえました。

あたたかい、明るいほのおは、まるで、小さいろうそくの火のようでした。少女はそのまわりに手をかざしました。なんてよくもえるのでしよう！　なんだかピカピカした真鍮のふたと、真鍮の胸のついていて大きな

な鉄のストーヴの前にすわっているような気がしました。火は、あたたかく、あかあかともえました。少女は、足もあたたためようと、そつとのおきました。そのとたん、ほのおは消えて、ストーヴも見えなくなりました。少女の手には、ただもえさしのマッチがのこっているばかりでした。

雌<sup>め</sup>牛<sup>うし</sup>のブーコーラ





むかし、おじいさんとおばあさんが、みすばらしい小屋に住んでいました。ふたりにはむすこがひとりありましたが、ちつともはたらかない子でした。小屋に住んでいたのは、この三人だけ、飼っていたのは、たった一頭の雌牛だけでした。その雌牛は、名前をブーコラといいました。あるとき、ブーコラに

子牛が生まれました。  
おばあさんはよく世話を  
してやって、子牛がぶじ  
に生まれると、安心して  
小屋にもどりました。と  
ころが、しばらくしてよ



うすを見に行つてみると、ブーコラの姿がありません。おじいさんとおばあさんは、ブーコラをさがしに出かけましたが、どんなに遠くまで行つても、雌牛は見つかりませんでした。

そこで、ふたりは、こんどはむすこをよんでいつけました。

「さあ、ブーコラをさがしに行つておいで。見つけるまでは、けつして帰つてくるんじゃないよ」

おじいさんとおばあさんは、むすこにお弁当と新しいくつをやり、むすこは旅に出かけました。そして、どこまでもどこまでも歩いていき、それから腰をおろして、お弁当を食べました。食べおわると、むすこは大きな声でよんでみました。

「ブーコラや、もし生きているんなら、モーとひと声鳴いておくれ」

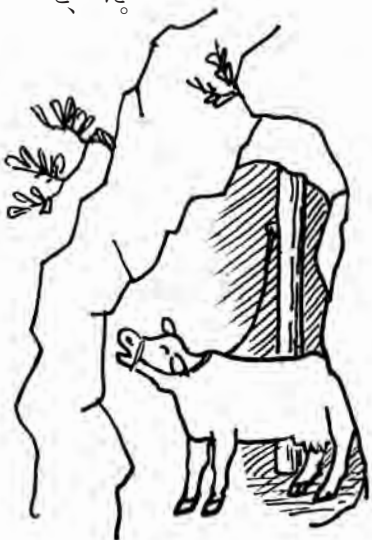


すると、はるか遠くのほうから、  
「モーウ」と、ブーコラの鳴く声が  
聞こえました。そこで、むすこは先  
へ先へと歩いていきました。しばらく  
く行つてから、また草の上にすわりこんで、お弁当を食べ、それから、  
もう一度よんでみました。

「ブーコラや、もし生きているんなら、モーとひと声鳴いておくれ」  
すると、さつきより少し近いところから、「モーウ」と、ブーコラの  
鳴く声が聞こえました。そこでむすこは、また歩きだしました。こうやっ  
てどこまでも歩いていくと、大きな岩山がありました。むすこは、その  
岩山の上ですわつてお弁当を食べると、もう一度よんでみました。

「ブーコラや、もし生きているんなら、モーとひと声鳴いておくれ」  
すると、どうでしょう。その岩山のすぐ下で、「モーウ」と、ブーコ  
ラが鳴く声でしたではありませんか。

むすこはいそいで岩山をおりていきました。見ると、岩山に大きな穴  
があいています。その穴にはいつていつてみると、ブー  
コラが太い柱につながれて  
いました。むすこはそのつ  
なをほどくと、ブーコラを  
引っぱつて家にむかいました。  
ところが、しばらく行くと、





おそろしく大きな女のトルルが、もう少し  
小さいむすめトルルをつれて、追いかけてき  
ました。トルルたちはとても足がはやくて、  
むすこは今にもつかまりそうになりました。

「ブーコラや、どうしよう」とむすこがいうと、ブーコラはこたえました。  
「わたしのしつぽから毛を一本ぬいて、地面じめんにおいてごらん」

そこで、むすこがブーコラのしつぽ  
から毛をぬいて地面じめんにおくと、ブーコ  
ラはその毛にむかつていいました。

「空を飛ぶ鳥でなければこえられない、  
大きな大きな川になれ」



すると、たちまち、その毛は大きな

大きな川になりました。けれども、

女トルルは川のそばまでやってくると、

「なんだ、こんな川」といつて、むすめトルルに、

「むすめや、家へ帰って、父さんの

大きな雄牛おしをつれておいで」と、

いいつけました。

むすめトルルは走っていったと思う

と、すぐにとほうもなく大きい雄牛おしを

引っぱってきました。雄牛おしはひと息いきで

川の水を飲みほしてしまいました。

